

## 300. 信楽町新宮神社遺跡調査速報

### 1. はじめに (位置と環境)

『続日本紀』天平14~17(742~745)年条に記載のある紫香楽宮は、信楽谷の北端、つまり滋賀県甲賀郡信楽町黄瀬から宮町にかけての地域に所在していたと考えられてきた。宮跡そのものの所在については長い論争があったものの、近年の発掘調査により宮町遺跡が紫香楽宮、史跡紫香楽宮跡が甲賀寺であると考えることが妥当なものとなっている。

新宮神社遺跡は、信楽谷の北端部である信楽町黄瀬に所在する。紫香楽宮推定地である宮町遺跡は宮町の小盆地の中に位置し、唯一馬門川の流れ出る南方に開いている。宮町遺跡から南へ約1km、狭隘な地形を抜けて視界が開けるところに位置するのが新宮神社遺跡である。ここから更に約1km南へ進むと、甲賀寺に至る。更に信楽谷を南方に進むと『続日本紀』14年条に記載のある「恭仁京東北道」により恭仁京へと至る。

恭仁京から見ると、「恭仁京東北道」を東北方向に進み紫香楽宮へと至るためには新宮神社遺跡を通過する必要がある。つまり、「恭仁京東北道」の行き着く先、紫香楽宮へ通じる「道」が新宮神社遺跡を通過していた可能性があるのだ。

### (過年度の調査)

新宮神社遺跡は、かつて二次にわたる発掘調査が実施されている。県道牧・甲西線の拡幅に伴う調査(一次調査)、遺跡の範囲確認調査(二次調査)が何れも信楽町教育委員会によって実施され、前者の調査においては奈良~平安時代のもと考えられる南北方向を指向する溝一条を検出しているほかには特筆すべき調査内容はなかった。

### (調査の経緯)

第二名神高速道路建設予定地に新宮神社遺跡が所在することから、建設工事に先立って遺構の有無を確認するため平成8年度に周辺の試掘調査を実施した。その結果、奈良時代を中心とする時期の遺構・遺物が確認されたことから、平成12年度に発掘調査を実施することになった。当該地点は、県道牧甲西線および馬門川

を越えるために橋脚が設けられることとなっており、発掘調査は、橋脚部分および本線側道部分、橋脚設置に伴って移動を余儀なくされる県道移動部分を対象とした。

### 2. 調査の結果 (調査着手前の状況)

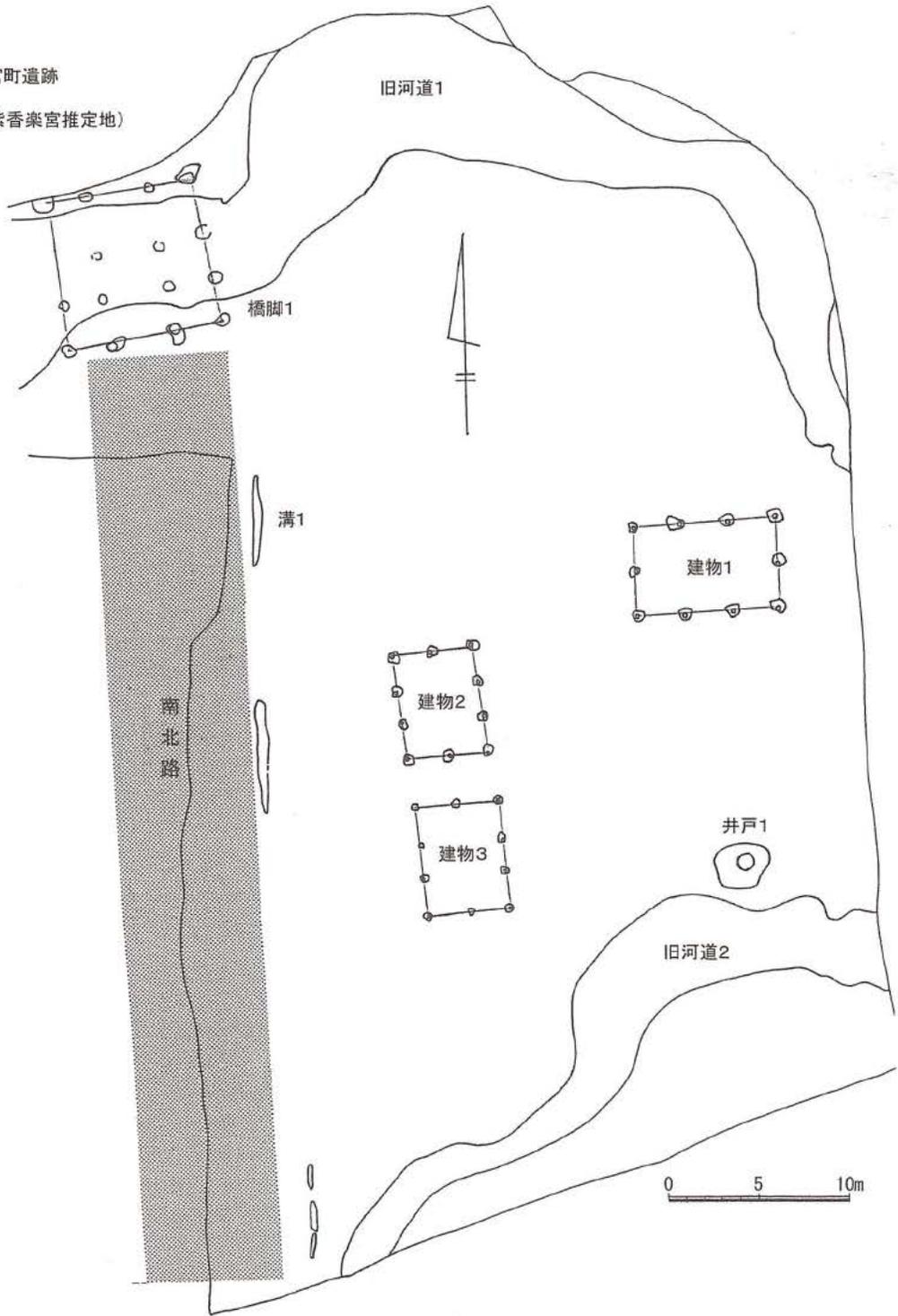
調査着手前に、新宮神社遺跡の周辺環境について1/2500の地図での検討、空中写真による実体視、踏査を行った。

その結果、新宮神社遺跡の所在する谷(通称大蔵谷)にある水田畦畔の中に、地形に従わない南北方向の短冊形畦畔がみられた。また、空中写真の実体視では、大蔵谷の北方に東西方向に延びる丘陵を人為的に断ち切ったとみられる痕跡を読みとることができ、現地を踏査したところ、丘陵を切り通していることが判明した。さらに、南北方向の畦畔とも概ね方向および位置が合致することを確認した。この時点でいつまで遡るかは明らかではないものの、「道」の存在を想定した。また、信楽町教育委員会による新宮神社遺跡の一次調





至 宮町遺跡  
(紫香樂宮推定地)



至 史跡紫香樂宮址 (甲賀寺推定地)

奈良時代の遺構配置概略図

査結果を地図上で合成し、その位置関係を確認した。国土座標を用いていないため厳密なことはいいがたいが、宮町から唯一南方に抜ける馬門川沿いの狭隘な地点に向かっていることが明らかとなった。出土遺物の内容が明らかではないものの、奈良～平安時代の溝であると考えられていることから道路側溝である可能性を選択肢の一つに挙げた。

#### (発掘調査の概要)

調査の結果、掘立柱建物4棟、井戸1基、橋脚2基、土坑数基、溝数条、旧河道1条、水田関連遺構を検出した。遺物は、縄文時代の所産と見られる石器剥片、奈良時代中頃の土器・木製品・木簡、平安時代後期の土器、江戸時代後期から明治にかけての陶磁器が出土している。これらの中で、奈良時代中頃の紫香楽宮に関連すると考えられるものについて概要を記す。

建物関係の遺構は、掘立柱建物3棟を検出している。何れも3×2間のものである。これらは東西棟1棟と南北棟2棟から構成され、L字型の配置を取り、同時期に存在したものと考えられる。何れの建物も建て替えはなく、短期間の内に廃絶したものとみられる。

井戸は1基のみ検出している。杉の丸太刳り抜きを井筒とし、L字に配された建物群の東南角に設けられている。

橋脚は奈良時代中頃ののものとしては1基検出している。3×3間の掘立柱式のもので、幅約8.5m、長さ約9mを測る。遺跡の立地する谷を東西に流れる旧河道1の渡河のために設けられたものである。柱は全て抜き取られ、遺存していなかった。ただし、旧河道1から加工された直径約40cmのヒノキ材が出土しており、掘立柱建物の柱とは考えがたいことから、橋脚に用いられたものと推定している。なお、このヒノキ材は年輪年代測定の結果、744年(天平16)に伐採されたと考えられる。

橋脚遺構東端に対応して、南北方向に延びる溝を検出している。位置関係から、橋脚に至る道路の側溝(東側溝)であると判断できる。なお、西側溝については、確認を行ったが、後世の削平の為に遺存していなかった。橋脚の幅から推定すると、幅12m程度のものであったとみられる。

旧河道1からは、数カ所の廃棄ブロックを確認することができ、何れも奈良時代中頃の遺物が多量に出土している。須恵器・土師器・黒色土器からなる土器類については、近江地域の在産産と考えられるものよりも、搬入されたと考えられるものが主体を占めており、特異な要素を呈している。中でも煮炊具には平城京から持ち込まれたと考えられるものが一定量存在する。また、硯(転用硯)の比率が、一般的な集落と比較すると格段に多く、役所的な側面があったことをうかがわ

る。瓦も僅かに出土している。中でも数点の軒平瓦が出土しており、甲賀寺跡出土資料と比較した結果、同範であることが確認できた。更に、山背国分寺塔跡出土瓦との比較の結果、両者は同範であり、範傷の進行から山背国分寺塔跡出土事例が後出する事が確認できた。木製品については、曲物や皿・柄杓などといった日用の雑器のほか、舟形代・人形代といった祭祀品、木簡が出土している。木簡については、墨がとんで判読しづらい部分が多いが、「上総國山邊郡□□□□天平十六年十月」と書かれており、744年の紀年銘木簡であることが判った。

一次調査で検出された溝の延長を検出した。宮町(紫香楽宮)に至る狭隘な地形に向かっていることが確認できたが、対になる側溝の存在を確認することはできなかった。今後の調査の課題である。

### 3. まとめ

調査の結果から考えられることについてふれ、まとめとする。

出土遺物の年代および紀年銘木簡の年代、年輪年代測定で導き出した年代からは紫香楽宮の存続時期に合致することが判った。また、出土遺物の組成は、近江地域の在地的な様相とは異なり、都城(平城京)での在り方に類似するものであることが判った。場の機能を示すものとしては、硯の出土頻度が高く、役所的な側面があったことをうかがわせる。

建物群および井戸は、建て替えが無く、短期間の内に廃絶した様相がうかがわれる。

道路および橋脚は、大蔵谷北側に延びる丘陵を人為的に断ち切ったと考えられる切り通しに向かっていることが明らかとなり、この切り通し自体が奈良時代中頃に遡ることが判った。

以上の点から、道路および橋脚は、奈良時代中頃の紫香楽宮の存続した時期に機能しており、位置関係から南の甲賀寺と北の紫香楽宮を結ぶ主要道路の一つであったことが判った。加えて、道路に接して施設が存在していたことも判ったが、短期間で廃絶している点や硯の出土事例が多い点をあわせ考えると、紫香楽宮に関連するものであったと推測することができる。当該地点が紫香楽宮に至る喉元にあたることを考慮すると、関所的な機能を持っていたかもしれない。

なお、馬門川沿いの南北溝については、延長を検出したものの、対になる溝を検出することができなかったことから、その性格については、今後の課題となった。また、紫香楽宮・甲賀寺を中核として、周辺にどのような施設が展開していたのかを明らかにしていく必要があるだろう。

(財滋賀県文化財保護協会 畑中 英二)